

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520425

研究課題名(和文) ツングース諸語の記述的研究

研究課題名(英文) Descriptive study of Tungusic languages

研究代表者

風間 伸次郎(KAZAMA, Shinjiro)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：50243374

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)： ナーナイ語、ウルチャ語、エウエン語、ソロン語、満州語などのツングース諸語について、現地調査を行い、民話や自由会話などを録音し、これを書き起こした。媒介言語によってエリシテーションも行い、文法的な情報を含む例文も多く収集した。これらはこれらそのものが危機言語に関する一次資料として極めて貴重なものである。さらにこれらのデータに基づき、音声、文法、語彙の諸点にわたり分析し、研究結果を論文にまとめ発表した。

研究成果の概要(英文)： I have researched Tungusic languages such as Nanai, Ulcha, Ewen, Solon and Manchu on the fieldwork I have recorded some folktales and free conversation and have done the dictation of them. I collected many sentences including grammatical information by elicitation. These oral materials have unique value as the materials of endangered languages. On the basis of these data I made clear on some grammatical problems, and wrote some papers on the problems.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：ツングース諸語 現地調査 口承文芸テキスト 言語人類学 危機言語 方言

## 1. 研究開始当初の背景

ツングース諸語はロシア極東地方、シベリアを中心に分布する言語で、いわゆるアルタイ諸言語に属する言語である。人口は約5万人ほどで、しかも50歳以下の年齢の者では母語としてこの言語を話せる人が少なく、いわば消滅の危機に瀕している言語である。日本にももっとも近い日本海の対岸という地理的位置からうかがえるように、日本語や朝鮮語とも、多様な類似が見られることがしばしば指摘されている。ツングース諸語はまたその系統的多様性、言語接触、譲渡可能性の表示などの諸文法的特徴などからみても興味深い点を多く持っている。ツングース諸語の研究はこれまで多くがロシアで行なわれてきたが、最近ではロシアでの困難な経済情勢からその研究自体も危機的状況に立たされている。このようにツングース諸語の母語話者がますます減りつづけ、言語の滅亡の危機がせまっている今、できるだけ早く詳細かつ正確な言語学的記録を行うことが急務である。

## 2. 研究の目的

本研究の代表者は、これまでさまざまな研究課題による調査の機会をとらえてツングース諸語の実地調査による記述研究に継続的に取り組んできたが、資料の収集はさらに緊急を要しており、収集と整理・刊行にあたる必要性を痛感している。そこで次のような目的のもと、本研究の構想に至ったものである：

- (1) 実地調査によるツングース系危機言語の記録
- (2) テキスト・データの収集整理とコーパス化、および刊行・公開
- (3) 現地社会への成果還元、現地語の普及及び教育

以下、順を追って詳しく述べる。

### (1) ツングース系危機言語の記録

ツングース諸語はこれまで、言語学の世界ではあまり知られていなかった数多くの興味深い現象に関するデータを提供するなど、言語学的価値がきわめて高いにもかかわらず、これまで現地調査の困難さに加え、基礎的研究のデータも絶対的に不足していたため、その全貌にせまる記述言語学的研究は行なわれてこなかった。この状況の中では、現地調査で収集した一次資料に基づいて研究がなされる点に、なによりも大きな意義と独自性があるといえる。

満州語を除くツングース諸語には文字の伝統がなく、二、三の言語がソ連時代以後、ロシア文字による書記法を与えられたものの、民族自身による十分な記録を残すには至っていない。このままではツングース諸語は不十分な記録のまま、地球上から消え去る運命にある。言うまでもなく、このことは人間

の言語のありうる姿を考える言語類型論の研究推進にとっても大きなマイナスである。特に日本語や朝鮮語とも共通点の多い「アルタイ型」の一つのタイプを示しながら、独自の特徴的な点も多いツングース語は、言語類型論のデータとしてもきわめて貴重であり、その記録は急務である。

### (2) テキストの収集とコーパス化

このような観点から、本研究では危機に瀕したツングース諸語のテキスト収集とそのコーパス化ならびに刊行を目的とする。本研究テーマのような言語の記述的研究を行なう際には、ツングース諸語の母語話者の密接な協力に基づいた現地調査資料の収集、記録、分析がもっとも重要である。資料収集においては、ツングース諸語は危機に瀕している言語であるため、一刻も早く大量のテキストを現地調査で得る必要がある。同時にこれまでの調査で得られたさまざまな例文データを整理、分析し、また電子化することによって、ツングース諸語のデータベース構築のための基礎作りを目指さなければならない。

### (3) 現地への成果還元

本研究は、このように現地調査によって記録・記述を行う一方で、その成果を現地の話者及び村へ還元していくことを重要な目的と考えている。危機言語の調査研究において、これは何よりも大切な点の一つであるが、本研究の成果は現地の人たちにも利用しやすい形で刊行・発表していく。具体的には次のような点に留意しつつ成果を刊行する。すなわち、現地語のロシア文字での表記および現地での支配的言語であるロシア語での訳を用意する。映像や音声を入れたCDも刊行物に添付し、子供向けの絵入り教材などを作成する。これにより今後もこの貴重な言語と文化を守っていくことに少なからず寄与できるものと考えている。

## 3. 研究の方法

### (1) 実地調査1

これまでと同様に、夏期の授業休業期間を利用して、現地調査を行った。具体的にはハバロフスク州のナーナイ地区ナイヒン村のナーナイ語、およびマガダン州マガダンのエウエン語を研究した。わずかながらまだ物語を語ることのできる貴重な話者がいらっしゃるの、その録音を優先しつつ、これまでに蓄積してある録音の書きおこしをすすめてきた。現地では言語学的資料のみならず、言語の解釈にも重要な民族的事物の写真や映像の記録も行った。

### (2) 整理・分析作業と刊行準備

持ち帰った資料の整理としては、電子化、タグ付け、検索による修正、完全な対訳の作成、原文と訳の位置合わせ、などをはじめとする根気の要る作業がある。基本的にその言

語やロシア語に習熟した代表者自身以外にはなかなか難しい作業ではあるが、単純作業になる部分はきちんと説明すればアルバイトにも可能である。さらに刊行準備には要約、索引の作成、要約のロシア語訳、英訳の作成などがある。これらの作業を確実にこなしていく必要があった。

他方で国内にいる間には、最近の言語記述、特に少数民族の言語記述に関する最新の記述の枠組みについての消化や摂取が必要である。言語記述の枠組みの中でも特に文法の記述は最新の理論研究の発展に伴い、絶えずレベルアップされてきており、分析に際しては類型論的ならびに対照言語学的な視点からの再解釈や再検討が必要である。

### (3) 資料の刊行

写真ページの編集、話者情報等をはじめとするまえがきを整理し、文法接辞の一覧表も作成して刊行を行って来た。諸研究機関およびロシアをはじめとする海外研究者への発送等も行った。

### (4) 実地調査2

3月の授業休業期間に二度目の調査を行った。初年度は夏期と同じ地を再訪する。冬季の生業についても観察し、それに関する文化的情報についても現地語で語っていたき、テキストを作成した。

## 4. 研究成果

成果の多くは、論文及び科研報告書として民話集などの資料を刊行し、学会発表などでもその成果を公表してきた。

以下では今回発表したいいくつかの論文の要旨を示すことによって、今回の研究成果におけるもっとも重要な点について概観することとしたい。

「ツングース諸民族の口承文芸について」においては、ツングース諸語の口承文芸について、その内容(2節)、登場人物(3節)、表現形式・言語形式(4節)、隣接諸民族の口承文芸との類似(5節)の各方面から考察した。

「ナーナイ語の複文について：条件表現の使い分けを中心として」は、大きく2つの部分よりなる。まず前半では、Tsunoda (2010)における複文における五段階(Five Levels of subordination)に関する調査例文(questionnaire)に基づき、ナーナイ語の理由(Causal)と条件(Conditional)と逆接(Counter-expectational)のデータを示す(1. 予備調査)。次に後半では、この中から特に条件表現において観察される諸形式の使い分けをとりあげ、コーパスからの帰納的な分析によって、その使い分けの条件を明らかにする(2. ナーナイ語の条件表現)。そこでは日本語との対照も行った。

「アルタイ諸言語における準動詞と言いさしについて」の大きな目的は、単文の統語論が、複文の統語論や言いさしの成立に大きく関連していることを示すことにある。Evans (2007) が指摘しているように言いさし(insubordination)にはエヴィデンシャルな意味やモーダルな意味を実現するものがある。例えば、次のようなif条件節による言いさしは、丁寧な要求というモーダルな意味を実現するようになる。

(1) (I wonder) If you could give me a couple of 39c stamps please

(1) If you could give me a couple of 39c stamps please,

(I 'd be most grateful)

(Evans (2007: 380))

本稿では、このような点にも注目しつつ、諸言語における言いさしについて考察した。

「対照言語学的観点からみた相対テンスについて」では下記のような問題点についての考察を行った。すなわち、現代日本語において動詞の終止形と連体形は同じ形をとる。したがって非過去のル形および過去のタ形は従属節における時制を示すのにも用いられる(1)~(2)。

このように終止形においてテンスで対立する形式は、時を示す従属節中などにも用いられるが、それらは発話時を基準としたテンス(絶対テンス)を示さず、主節の行為の時の時間的な前後関係のみを示すことができる。これは相対テンスと呼ばれている。

(1) ロシアに行く時に帽子を買った  
[文全体のテンスは過去、従属節(副詞節)中には非過去形]

(1) ロシアに行った時に帽子を買った  
[文全体のテンスは過去、従属節(副詞節)中には過去形]

(2) 名前を書く紙を持って来てください  
[文全体のテンスは未来、従属節(連体節)中には非過去形]

(2) 名前を書いた紙を持って来てください  
[文全体のテンスは未来、従属節(連体節)中には過去形]

したがって主節のできごとが過去のことで、その従属節中にル形(非過去形)が現れる一方(1)、主節のできごとが未来のことで、その従属節中にタ形(過去形)が現れる(2)。この点で、時制の一致というシステムを持つ英語などとは大きく異なっている。

なお(1)や(2)との比較から、(1)や(2)の従属節の形式も相対テンスとして働いているものと考えられるが、厳密には(1b)や(2)の従属節の形式が相対テンスとして働いているのか絶対テンスとして働いているのかはわからない、ということに注意したい(この点は後で再び問題にする)。

さて、アルタイ諸言語では、一般に形動詞と呼ばれる形式が広い機能を持ち、名詞的な機能や連体的な機能で用いられるばかりでなく、文末述語としても用いられることがある。そしてこれらの形動詞はテンス（もしくはアスペクト）に関して対立・分化している。名詞的に用いられる場合には与格などをとって時を示す副詞節を形成することもできる。したがってアルタイ諸言語においても、上記の日本語の例文とよく似た表現を形成することができる。本稿ではこのような構造ならびにそれに類似した構造を広く取り扱うことにする。

では日本語およびアルタイ諸言語の形動詞による時の表現はどこまで類似しているのだろうか？ アルタイ諸言語もみな日本語と同じように相対テンスのシステムを示すのだろうか？ そのシステムはどこが似ていてどこが違うのだろうか？ 本稿はこのような問題について考察した。対照するアルタイ諸言語として本稿で取り上げるのは、トルコ語（チュルク諸語）、モンゴル語（モンゴル諸語）、ナーナイ語（ツングース諸語）の3つである。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 9件)

KAZAMA, Shinjiro (2014) The verbals and insubordination in Altaic-type languages. *Asian and African Languages and Linguistics*. 8. ILCAA. 31-57. (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(編)『アジアとアフリカの言語と言語学 8』31-57.) 査読有

風間伸次郎(2014)「日本語の類型について「アルタイ型言語の解明を目指して」北海道大学大学院文学研究科 北方言語ネットワーク(編)『北方言語研究』4: 157-171. 査読有

風間伸次郎(2013)「対照言語学的観点からみた相対テンスについて」北海道大学大学院文学研究科 北方言語ネットワーク(編)『北方言語研究』3: 175-199. 査読有

風間伸次郎(2013)「アルタイ型言語における感情述語」北方研究教育センター(編)『北方人文研究』6: 83-101. 査読有

風間伸次郎(2012)「アルタイ諸言語における準動詞と言いさしについて」北海道大学大学院文学研究科(編)『北方言語研究』2: 139-162. 査読有

風間伸次郎(2011)「ツングース諸民族の口承文芸について」北海道立北方民族博物館

(編)『北海道立北方民族博物館研究紀要』20: 25-54. 査読有

Kazama, Shinjiro (2011) Typological notes on copula constructions. In: Kurebito T (eds.) *Linguistic Typology of the North*, 2: 39-54. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA). Fuchu: Tokyo University of Foreign Studies. 査読有

Kazama, Shinjiro (2011) Are there lexical affixes in Tungusic, or what is the lexical affix. In: Kurebito T (eds.) *Linguistic Typology of the North*, 2: 55-66 Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA). Fuchu: Tokyo University of Foreign Studies. 査読有

風間伸次郎(2011)「ナーナイ語の複文について：条件表現の使い分けを中心として」北海道大学大学院文学研究科(編)『北方言語研究』1: 115-138. 査読有

〔学会発表〕(計 7件)

風間伸次郎 2014年2月23日、国立国語研究所におけるNINJAL Typology Festaにて“Nominal Predicates in Tungusic languages. Diachronic analysis on nominal predicates -- focusing on -ča iin tungusic languages --”という題で発表。

風間伸次郎 2013年6月17日、茨城大学における日本言語学会第146回大会の公開シンポジウムにて、「類型なのか、言語地域なのか？ 日本語は北東アジアの言語なのか？」という題で発表

風間伸次郎 2013年2月16日、東京外国語大学で行われた国立国語研究所「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性(略称:「他動性」)他動性プロジェクト:言語類型論チーム」24年度第3回研究会にて、「ツングース諸語における自他対応」という題で発表。

風間伸次郎 2012年12月8日、国立国語研究所における「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」音韻再建班 24年度第2回研究発表会にて、「ツングース諸語の歴史と音対応について」という題で発表。

風間伸次郎 2012年12月2日、東京外国語大学AA研における「北方諸言語の類型論的比較研究」第8回研究会にて、Relative tense in contrastive linguistics という題で発表。

風間伸次郎 2012年6月17日、東京外国語大学における日本言語学会第44回大会の公開シンポジウムにて、「唯物論か、唯識論か？

アルタイ型言語における感情述語の諸相」という題で発表

風間伸次郎 2012年6月2日、東京外国語大学 AA 研における「北方諸言語の類型論的比較研究」第7回研究会にて、「対照言語学的観点から見た相対テンスについて」という題で発表。

〔図書〕(計 7件)

風間伸次郎(2013)『エウエンの民話』ツングース言語文化論集 56. 府中：東京外国語大学.

風間伸次郎(2013)『ナーナイ語諸方言の研究2』ツングース言語文化論集 57. 府中：東京外国語大学.

風間伸次郎(2012)『ナーナイの民話と伝説13』ツングース言語文化論集 53. CD付. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

風間伸次郎(2012)『ナーナイ語諸方言の研究』ツングース言語文化論集 54. CD付. 府中：東京外国語大学.

風間伸次郎(2012)「コピュラ文の諸相」影山太郎・沈力(編)『日中理論言語学の新展望2 意味と構文』85-106. 東京：くろしお出版.

KAZAMA, Shinjiro (2012) Designative case in Tungusic languages. TURCOLOGICA 89. Recent Advances in Tungusic Linguistics. Ed. by A. L. Malchukov and L. j. Whaley. 123-153. Harrassowitz Verlag.

風間伸次郎・トヤー(共編著)(2011)『ソロン語基礎語彙』ツングース言語文化論集 52. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

風間伸次郎 (KAZAMA, Shinjiro)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：50243374